

宮澤賢治論

——「雪渡り」から「やまなし」へ——

目 置 俊 次

—

大正十年一月二十三日の夕方四時半過ぎ、満二十四歳の宮澤賢治は家族に無断で家を飛びだし、突然上京する。賢治文学が始動する一つの原点がこの上京である。關德彌あて書簡185（大10・1・30）には、その日の上野行き夜行列車へ飛び乗ることになった契機が次のように描かれている。

その時頭の上の棚から御書が二冊共はったり背中に落ちました。さあもう今だ。今夜だ。時計を見たら四時半です。汽車は五時十二分です。すぐに台所へ行つて手を洗ひ御本尊を箱に納め奉り御書と一所に包み洋傘を一本持つて急いで店から出ました。

この上京を促した「御書」とは、賢治愛読の靈艮閣版『日蓮

聖人御遺文』とされる。『縮刷遺文』と呼ばひ慣らわされているものである。しかし賢治は同じ「御書」を二冊持っていたのであるまい。國柱会より出版された田中智學編『重訂照校類纂高祖遺文録』（大4・10）が並べておいてあり、靈艮閣版と國柱会版の「御書」が同時に落ちてきたのである。『高祖遺文録』を計量してみると約一、一キロの重さがある。『縮刷遺文』も同様に厚い。これほど厚い書物が二冊、同時に棚から落ちるのは確かに珍しいことで、背中に落ちれば苦痛も覚えよう。賢治がそこに何らかの啓示を感じたとしても不思議はない。すなわち賢治は、もちろん法華經信仰に命じられるような気持ちで上京したのであるが、具体的には國柱会の存在こそが大きなねえになっていたのである。國柱会の「御書」と國柱会からもらった「御本尊」である佐渡始頭の妙法曼荼羅を持ち、國柱会を目

指して上京したのである。賢治は二十四日午後に上野の國柱会館を訪ねる。そこで國柱会講師であり理事でもある高知尾智耀に出会う。高知尾はその時の様子を次のように回想する。

一人の青年の来訪に、玄関先へ出てゆくと、頭は五分刈、紺ガスリの和服姿に、洋傘と風呂敷づつみをもった、質実そうな二十五六歳の青年が立っていた。用向きをたずねると

「私は昨年、國柱会の信行員として入会をゆるされた岩手県花巻の宮沢賢治というものであります。爾來國柱会のご方針にしたがって信仰にはげみ、一家の帰正を念じて父の改宗をすすめておりますが、なかなか了解してくれません。これは私の修養が足りないために父の入信が得られない、この上は國柱会館へ行つて修養をはげみ、その上で父の入信を得るほかはないと決意し、家には無断で上京して来たものであります。どういう仕事でもいたしますから、こちらに置いて頂きご教導をいただきたいのです」ということであつた。

「雨ニモ負ケズ」手帳には、「高知尾師ノ獎メニヨリ 法華文学ノ創作」というメモが記されている。高知尾の勧めが賢治を童話創作に駆り立てたことは間違いない。その点について、高知尾は次のように述べている。

私には法華文学の創作をすすめたという明確な記憶はないが、いろいろ信仰上の意見を交換した中には、当然私が

田中智学先生から平素教えられている、末法における法華經修行のあり方について、熱心に話したことと思う。すなわちいわゆる出家して僧侶となり仏道に専注するのが唯一の途ではない、農家は鋤鋤をもつて、商人はソロバンをもつて、文学者はペンをもつて、各々その人に最も適した道において法華經を身によみ、世に弘むるというのが、末法における法華經の正しい修行のあり方である、詩歌文学の上に純粹の信仰がにじみ出るようであればならぬ、ということを話したように思う。

それを聡敏な賢治は、私が法華文学の創作を勧奨したと受けとつたのであろう。それが「高知尾師ノ獎メニヨリ 法華文学ノ創作」となつたのではなからうか。

國柱会館に滞在はできなかったが、その後の賢治が、謄写印刷のガリ版切りなどで生活費を稼ぎながら、法華經の教えを実践しようという熱い思いを抱き続けていたことに異論はあるまい。この上京以前に、賢治は既に國柱会に奉仕をする生活を送っていた。大正九年十月に國柱会へ入会した賢治が、上京するまでにはおよそ三月ほどしかないが、高知尾は入会した頃の賢治について、次のように述べている。当然といえば当然のことだが、賢治が上京以前に『高祖遺文録』を精読していたことが分かる。

賢治は國柱会信行員となるや、御修行を怠らなかつたばかりでなく、正しい信仰の広布に全力をつくした。すなわ

ち父上をはじめとし、家族や親戚の人々、またあらゆる人々に対して機会あるごとに国柱会の正しい信仰を鼓吹したのである。田中智学先生の統裁される日刊『天業民報』を拝読後は、門前に掲示板をつくって日々掲出し、田中先生著の各種の伝道用パンフレットを求めては、各方面に施本して精読をすすめた。また親戚および親しき人々と相会して御修行または信仰座談会をひらいた。そして彼自身は田中先生の著書はほとんどこれを読破し、なかならず『日蓮主義教学大観』を精読し、同じく先生監修の『類纂高祖遺文録』などの拝読を怠らなかつた。

大正九年一月二日付けの保阪嘉内あて書簡(177)に、「今度私は國柱会信行部に入会致しました。即ち最早私の身命は日蓮聖人の御物です。従つて今や私は田中智学先生の御命令の中に丈あるのです」とあるように、田中に絶対服従を誓い、それを公言していた賢治に、田中の「御書」が落ちて来た。賢治は上京を決心した。当然の流れとして國柱会の田中を訪ねた。國柱会が最も力を入れている布教という方向性が一つのヒントとなり、上京したのちの賢治は、趣味や自己満足のために発表のあてもなく文学作品を書くのではなく、法華経信仰がにじみ出るような述作を発表しようとした。伝道のために、発表することを前提にして作品を書く。作品を書いても、発表しなければ、布教活動にはならないのである。あくまでも信仰が「にじみ出る」ことが重要である。こうした賢治の布教への強

い意志は、高知尾による次のような記述からも明らかである。

また当時は大正9年に日刊『天業民報』が創刊されてまでもないところで、國柱会の講師と会館詰めの青年は、毎日のようにお昼休みを利用して、ほど近き上野公園に行き『天業民報』を施本し、読者を募るべく屋外宣伝をやった。賢治もおりおりこれに加わり、壇上に立つて講演をされたそうである。私はいっしょになったことはなかったが、のちに他の青年から賢治が熱心に絶叫されたという話を聞いた。

日刊『天業民報』が創刊されたのは大正九年九月である。國柱会そのものが布教活動に最も高揚感をあふれさせていた時期である。「天業民報」創刊の一月後に國柱会に入会し、その三か月後に「御書」に背中を押されて上京し、東京という大都会で信仰を「絶叫」しながら、その高揚した空気に包まれて、賢治は読者を想定した創作に打ち込んだ。それは主に童話という形をとった。伝道用の新聞も、法華文学としての童話も、多くの人に読まれなければ意味がない。法華経も御遺文も、共に文章は難解である。しかし、童話なら子供から大人まで読めるのである。關德彌あて書簡195(大10・7・13)には、「私は書いたものを売らうと折角してゐます。それは不真面目だとか真面目だとか云って下さるな。愉快な愉快な人生です。お、妙法蓮華経のあるが如くに総てをあらしめよ」「これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です」という言葉が見え

る。法華經に導かれて作品を書くだけではなく、布教活動として原稿を「売る」ことが、ある意味で、賢治の精神をただの趣味人から職業作家たらしめたといえるであろう。そしてもう一つ、辻説法は日蓮もよく行ったことだが、信仰の言葉を直接「絶叫」しても、振り返る人は少ないという事実を、賢治は上野公園での辻説法から学んでいたのではなからうか。比喩的にいうならば、そこでは「絶叫」するだけではなく、例えば無心に酒をふるまうような行動も必要になると、時間をかけながら賢治はおいおいと理解していったのではなかっただろうか。いつてみれば童話は、布教におけるその酒にあたるものにもなるのではあるまいか。

そしてもう一つ、田中智學の問題が残る。上京中、賢治はとうとう智學に会いまみえることがかなわなかった。智學は確かに近くににいるのに、会うことのできない、いわば隠された存在であった。この隠された太陽のような智學の存在がどのような影響を賢治に及ぼしたのか、あるいは賢治はその状況をどのような啓示として受け取ったのか、われわれは考えなければならぬのである。

宮澤賢治が、上京した年の終わりに初めて発表した童話が「雪渡り」である。「雪渡り」は「愛國婦人」(大10・12・大11・1)に掲載された。その後に発表された童話が、大正十二年四月八日付の「岩手毎日新聞」掲載の「やまなし」である。「発表」という観点から見れば、「雪渡り」が賢治童話の処女作

である。しかし「雪渡り」は読者投稿欄に掲載された作品なので、素人作品という扱いが付きまといっている。新聞の一面を独占して「宮澤賢治特集」といつてもよい形で発表された「やまなし」が本格的な処女作であるということもできるのである。「やまなし」が釈迦の誕生日に発表されていることも象徴的であり、そこには賢治の作家としての意図が強く働いていることが考えられ、「やまなし」を処女作と呼ぶべき大きな理由となるであろう。この二作には継続性と差異が認められる。例えば「酒」のイメージの扱いひとつをとってみても、この二つの「処女作」の間には大きな違いが認められるのである。

本論考は、これらの二つの「処女作」の関係を考えながら、その変遷の背後に隠されている宗教的な側面に光を当てる試みである。

二

「雪渡り」は小学生の四郎とかん子という兄妹の物語である。ここには賢治とトシというモデルも想定されるが、それよりも「やまなし」の主人公である蟹の兄弟を連想させる。「雪渡り」は二部構成であり、前半(その一)は「お日様がまっ白に燃えて雪をギラギラ照らしました」(初出形)、「お日様がまっ白に燃えて百合の匂を撒きちらし又雪をぎらぎら照らしました」(発表後手入形)というように太陽の光の世界を描く。後半(その二)は、「大きな十五夜のお月様がしづかに東の山から登り

ました」(初出形)、「青白い大きな十五夜のお月様がしづかに水の上から登りました」(手入形)というように、月夜の世界である。これは「やまなし」の二枚の幻燈の世界そのものであるといつてよい。「やまなし」は水の中が舞台であるが、初夏「五月」の日中の世界と、冬「十二月」の月の照らす夜の世界という対照的な二部構成になっている。

また「雪渡り」の後半には、「狐小学校の幻燈会」の様子が描かれるが、この幻燈というテーマがいうまでもなく「やまなし」に通じる。「雪渡り」末尾のシーンでは「その青白い雪の野原のまん中で三人の黒い影が向ふから来るのを見ました」(初出形・手入形異動なし)というイメージがあり、これは「やまなし」初出稿末尾の「三疋はほかほか流れて行くやまなしのあとを追ひました」「底の黒い三つの影法師」「親子の蟹は三疋自分等の穴に帰つて行きます」(初期形「三疋はほかほか流れて行く山梨のあとを追ひました」「底の黒い三つの影法師」「蟹は自分らの穴に帰つて行きます」という三人の肉親たちの黒い影というイメージと呼応するものがある。

「雪渡り」は題名にも雪が登場するが、初出形の書き出しに「雪がすつかり凍つてまるで大理石のやうに堅くなりました。／空も冷たい滑らかな青い石の板で出来てゐるらしいのです」とあって、そこに兄妹の「堅雪かこん、凍み雪しんこ」という歌が響く。この歌は東北地方北部に伝わる歌の類歌といわれ、兄妹の姿に賢治とトシの思ひ出が重ねられている可能性はむしろ

ん高い。

こんな面白い日が、またとあるでせうか。いつもは歩けない黍の畑の中でも、すすきで一杯だつた野原の上でも、すきな方へどこ迄でも行けるのです。平らなことはまるで一枚の板の上のやうです。そしてそれが沢山の小さな小さな鏡のやうにキラキラキラ光るのです。

「堅雪かこん、凍み雪しんこ。」

二人は森の近くまで来ました。大きな柏の木は硝子でこしらへた様な立派な氷柱を沢山下げて重さうにじつと身体を曲げてゐました。(初出形)

ここに重ねて描かれている雪や氷は、いうまでもなく本体は水である。水の変容が、異次元のような風景を切りひらき、異空間へと兄妹たちを誘う。この水のイメージは、実は深いところで「やまなし」の世界につながる。「やまなし」の幻燈に映し出されるのは青白い水の底の風景である。

二疋の蟹の子供らが青じろい水の底で話てゐました。

「クラムボンほわらつたよ。」

「クラムボンはかぶかぶわらつたよ。」

「クラムボンは跳てわらつたよ。」

「クラムボンはかぶかぶわらつたよ。」(初出形)

「やまなし」でも水の中の空間が異次元の世界のように展開し、笑つたり跳ねたりという遊びのイメージも組みこまれていて、「雪渡り」が掲載された「愛國婦人」は、賢治の母が会員

となつていた愛國婦人会の雑誌である。「雪渡り」掲載より三か月前の前の九月号には、賢治の童謡「あまの川」が掲載されている。

あまのがは／岸の小砂利も見いへるぞ。／底のすなごも
見いへるぞ。／いつまで見ても、／見えないものは、水ばかり。

この天の川の描写は、もちろん大きな水のイメージを基礎にしているが、その水が目に見えないという逆説的な面白さを狙った歌になっている。宇宙に流れている天の川の、水は見えないのである。「雪渡り」では雪や氷は見えるけれども、水そのものは姿を隠している。また「やまなし」では、水中心世界を描いているけれども水そのものは空気のように存在している見えない。遊びのイメージを維持しながら、このように水をめぐる逆説が連続する形になっているが、それは偶然ではあるまい。

ついでにいえば、あとで問題にする詩「心象スケッチ外輪山」は「やまなし」と同じ紙面に発表されたもので、賢治はこの「心象スケッチ外輪山」と「やまなし」を補充関係で考えていた可能性はある。この詩は次のように書き出される（初出形）。

（月は水銀、後夜の喪主／火山礫は夜の沈殿／火口の巨き
なえぐりを見ては／たれもみんな愕く筈だ。／風としづけ
さ／いま漂着する葉師外輪山／一升の石標もある／月光は
水銀、月光は水銀。）

本当の水がそこに見えているわけではないが、月光は水銀であり、液体として描かれる。外輪山で、夜の水銀のような月の光の中に震えながら、賢治はみんなと太陽が出てくるのを待っている。これは大正十一年九月十八日の夜明け、賢治が花巻農学校の生徒を引率して岩手山に登山しているときの情景である。

『雪ですか、雪ぢやないでせう』／『いゝえ』（困つたやうに返事してゐる）／雪ぢやないのだ、仙人草のくさだらうか

生徒との会話の実況中継という形で、こんな雪ではない「雪」のイメージも描かれているし、また次のように、海、雲、そして「濃い蔗糖溶液」といった「水」をめぐる比喩が縦横に用いられている。

天の海とオーパルの雲／暖い空気は／ふつと燃になつて飛ばされて来る／きつと屈折率も低く／濃い蔗糖溶液に／また水を加へたやうなのだらう。

空を見ても水そのものはやはり見えていない。こうした水をめぐる表現ともむすびついているのだが、水を象徴する星である月の描写でこの詩は始まり、月の描写で詩は閉じる。もちろん月のほかにもさまざまな星々が登場する。やや長くなるが詩の一節を引用する。

北斗七星は／いま山の下側に落ちてゐますが／北斗星はあれです／それは小熊星といふ／あの七つからわかります／

それから向ふに／縦に三つならんだ星が見えませう／下には斜めに房が下つたやうになり／右と左とは／赤と青と大きな星がありませう／あれはオリオンです、オリオン／です／あの房の下あたりに／星雲があるといふのです／今見えません／その下のは大犬のアルファ／冬の晚いちばん光つて目立つやつ／です

「愛國婦人」掲載の詩「あまの川」から「雪渡り」「外輪山」「やまなし」には連続するテーマがある。水のイメージを提示しつつ、「見えないものは、水ばかり」という発想がそれである。具体的な水が見えないのである。そしてその見えない水がさらに隠しているものがある。それが太陽という存在である。

賢治が熱い信仰を捧げたのは日蓮宗である。日蓮という名前は、太陽と蓮の花を表している。水に浮かぶ蓮の花は月を表しているが、究極的には水を表しているといつてもよい。水の世界とそして太陽、これがある意味で日蓮宗の核心をなすイメージであると考えられる。そしてその中心的存在は何といつても太陽であり、それはすなわち釈迦のことである。

三

法華文学であるはずの賢治の童話から、最も肝要な「法華経」という文字も、あるいは「南無妙法蓮華経」という題目も慎重に隠されている。そこに大きな謎がある。すなわち最も重要な部分を隠すこと、それが賢治の基本姿勢である。ただ隠すので

はなく、作品の深部からひそかに太陽のイメージを喚起し、さらに一歩進めた段階ではそこに釈迦が二重写しになっていくやうに目論むことが、賢治の「法華文学」の方法なのではないであろうか。その点を詳しく分析する前に、賢治童話の「二つの処女作」が、どのようにして発表されたのか、その経緯を確認しておこう。

東京へ着いたら六銭余ったので、二度ほど豆腐をたべ、三日仕事をさがし、一回卒倒したということだ。それから本郷の菊坂町では、芋と豆腐と油揚げを毎日食べて、筆耕もやっただし辻説教もやり、童話もうんと書いたと言う。

一カ月に三千枚も書いたときには、原稿用紙から字が飛び出して、そこらあたりを飛びまわったもんだと話したこともある程だから、七カ月もそんなことをしている中には、原稿も随分増えたに相違ない。

上京中の賢治について、弟の宮澤清六は右のように語っている。賢治が三千枚の原稿を書いたという話もすでに伝説化しているが、上京した高揚感の中で、周囲からさまざまな刺激を受けながら、勢いに乗って童話の原稿が書かれたことは事実であろう。しかし、布教という目的を考えれば、作品を書くだけではいけないのである。書かれたものは発表されなければならぬのである。

ほとんど着の身着のまま実家を飛び出した賢治は上野駅に着いた。下谷鶯谷の國柱会を訪ねたのち、本郷の菊坂に下宿し

て、東大赤門前にあった文信社という印刷所でガリ版を切って生計を立てることになる。文信社でアルバイトをしていた東京帝大学生の鈴木東民は、賢治のことを次のように描く。

賢治の仕事はガリ版で謄写の原紙を切ることであった。かれはきれいな字を書いたから、報酬は上の部であつたらうと思うが、それでも一ペエジ二〇錢ぐらいのものだつたらう。この仕事を専門にしている人でも、一日に一〇ペエジ切るのは容易でないといわれていた。(中略)

そのころのかれは袴を必ずつけていたが、帽子はかぶらなかつた。今でこそ無帽はあたりまえのことになつたが、当時、袴をつけて無帽というのは異様に感じられたものだ。その袴の紐にいつも小さい風呂敷包がぶらさがつていた。最初、わたしはそれを弁当かと思つていたが、童話の原稿だということだつた。もしもこれが出版されたら、いまの日本の文壇を驚倒させるに十分なのだが、残念なことに自分の原稿を引きうけてくれる出版業者がいな。しかし自分は決して失望はしない。必ずその時が来るのを信じているなどと微笑を浮かべながら語つていた。

ガリ版を切り続ける過酷な仕事を支えたのは、自分の書いた文字が印刷されて、多くの人々の目に触れるのだという喜びであつただろう。その印刷の文字がいつかは自分の「法華文学」の文字となり、もちろんガリ版ではなくきちんとした活字となることを夢見ながら、賢治は仕事に打ち込んでいたのではない

だろう。そして、鈴木東民が記録している「童話原稿を引き受けてくれる出版業者がいな」という賢治の嘆きは、先に引用した七月の書簡で「私は書いたものを売らうと折角してゐます」という言葉と呼応する。賢治は出版社に原稿を持ち込んで、断られるということを繰り返していたのではないだろうか。

「雪渡り」に関しては、読者投稿の「応募童話」として掲載されているが、二回に分けて連載されたことも含めて、通常の「応募童話」とはあまりに規格が異なる。佐藤泰平は、「九月号発行の直後頃に賢治が「かしはばやしの夜」などの童話を数篇、編輯局に持ち込み、冬号用に採用されたのがこの「雪渡り」だつた」と指摘する。中地文は、佐藤説や恩田逸夫の八月帰郷説を視野に入れつつ、「投稿作品が募集規程から外れるものがありながらも高く評価されて掲載された」と解釈するよりも、直接訪れた賢治の熱意に一度だけ編集局が折れたと捉えるほうが妥当性は高いのではないだろうか」と述べる。

佐藤泰平や中地文が指摘しているように、おそらく投稿した「あまの川」が掲載されたことを契機に、賢治が童話の原稿を持ち込み、編集部がそのうちの一編を掲載した可能性が高い。賢治は強い意志でセールスを敢行していたと考えられるからである。

「やまなし」の掲載においても、基本的に同じことが繰り返されたのではないか。「あまの川」と「雪渡り」がある意味でワンセットとなつていたように、賢治は童話だけでなく、詩も

合わせて、当時の岩手毎日新聞社に持ち込んだものではなかっただろうか。のちに触れるが、詩と散文はワンセットでなければならぬ。なぜなら法華経の構造がそうになっているからである。

岩手毎日新聞社主筆の岡山不衣は、賢治と同じ花巻市出身であり、旧制盛岡中学で石川啄木と親交を結んでいる。賢治と同郷でかつ中学の先輩であれば、何らかの伝手も存在したのではないだろうか。賢治は「心象スケッチ外輪山」と「やまなし」の原稿をベアで岡山のもとに持ち込んだと思われる。前年に妹トシが亡くなってその衝撃がまだ去りがたい時期の話であり、トシの法要のためにというような話も賢治はしたかもしれない。そこに岡山が同情した可能性もある。そして一度掲載の話が決まると、賢治は次のような条件を出したのではないか。「心象スケッチ外輪山」と「やまなし」を同時掲載する。掲載は四月八日の花祭りの日（釈迦の誕生日）とする。この二点である。岡山不衣はその話を承諾した。実際に紙面の第一段から「心象スケッチ外輪山」が始まり、続いて「やまなし」が始まって一面が埋まっているので、読者が順番に読むように活字が組まれている。「心象スケッチ外輪山」の詩は長いものだが、そこに流れている時間は、先生と生徒が昇る太陽を待つ時間である。

四

日蓮が誕生したとき、日蓮の母は霊夢で「浄潔無比なる蓮華

が雄大なる青海原から、光明赫奕たる日輪を載せて昇つた」という。幼名は善日磨、田中智學によれば、太陽の子という意味である。比叡山での遊学・修行から帰郷し、旭の森で立教開宗宣言としての題目を唱えた時、赫々たる太陽が昇る。まず田中智學『日蓮聖人略伝』から引用しよう。

東天に旭日の輝きわたる時、清澄の山上旭の森の高丘に登り、瞳々の日輪に向て、初めて『南無妙法蓮華経』と唱え、名を日蓮と改めた、是れぞ釈尊滅後、此世の中に正式に妙法五字を唱出した始まりである、

いかに太陽と釈迦、そして日蓮のイメージが結ばれているか、そしてどれほどこの妙法蓮華経が太陽と喻えられて来たかという点については、すでに過去の論考で十分な検討を加えて来たので、これ以上例証を要しないであろう。「心象スケッチ外輪山」は、生徒たちと夜明けの太陽を待ち望む賢治の心理が、生徒の発言や賢治の内心の声を交えながら描かれていくが、太陽そのものは最後まで現れない。この太陽を待つ構図は賢治の書簡や作品の中で繰り返し返されているが、そこには釈迦の到来を待つ気持ちで隠されている。それは後で触れる童話「四又の百合」の中で、みな「如来（正遍知）」の到来を待っている気分にも似ている。「四又の百合」でも如来の姿そのものにはどこにも描かれていない。「心象スケッチ外輪山」からさらに引用してみよう。

これから外輪山をめぐるのですけれども／いまはまだなん

にも見えませんから／もすこし明るくなつてからにしませう／え、太陽が出なくても／あかるくなつて／西岩手火山の方の火口湖やなにか／見えるやうにさへなればいい、んです／お日さまはあすこらへんで拝ませう。』／（黒い絶頂の右肩と／そのときのまつかな太陽／わたくしは見てゐる。／あんまり真赤な幻想の太陽だ。）

太陽を思い描きながら、月光の下で、賢治は何度も雲を見つめてゐる。見えない赤い太陽を想像することが重要なのである。そして現実に見えている雲は、やはり「水」の一つの姿なのである。

あれですか／あれは雲です、柔かさうですね、／雲が駒ヶ嶽に被さつたのです／水蒸気を含んだ風が駒ヶ嶽にぶつつかつて／上にあがり／あんなに雲になつたのです。／鳥海山は見えないやうです、／けれども／夜があけたら見えるかもしれませんよ』／（柔らかな雲の波だ／あんな大きなうねりなら／月光会社の五千噸の汽船は／動揺を感じはしないだらう／その質は／蛋白石だ、Glasswoodだ／水酸化礬土の沈殿だ）

アルミニウム塩にアルカリを加えると水酸化アルミニウムとして白色沈殿が生成するが、それは確かに雲のように見える。このように、比喩を駆使しながら雲というものの動きを詩は描いている。四月八日の花祭りの日に新聞を読んでいた読者はまずこの詩を読み、太陽を待つ心と、雲のうねりを感じながら、

その後に童話「やまなし」を読んだのである。

『クラムボンにはわらつたよ。』

『わらつた。』

にはかにバツと明るくなり、日光の黄金は夢のやうに水中に降つて来ました。（初出形）

先生が生徒に語る形で進行する「やまなし」の物語の中で、蟹の子らが口にする「クラムボン」は「眩む」（まぶしい）と「ぼんぼ」（ぼんやりまるい）という言葉から生み出された造語である。鈍い円形をした眩しいもの、それは川底から水面に見えている太陽である。水面の水の動きにつれてクラムボン、すなわち太陽はゆがんで揺らめき続ける。クラムボンが笑うのは太陽が輝くとき、殺されるのは雲に隠されて姿が消えるときである。「やまなし」とつながりのある童話「おきなくさ」でも、兄弟たちが仰ぐ空で、雲に隠されてしまふ太陽が描かれる。クラムボンが跳ねたり笑ったりするのも、水を媒介とした「ひかりとかげ」の揺らぎが呼び起こす現象である。詩「第四梯形」（「春と修羅」）でも「やまなし」の句の雲に起伏し／すこし日射しのくらむひまに」という一節があり、目のくらむ太陽とやまなしのつながりが垣間見える。いびつに円く金色をしたやまなしの果実は、夜に訪れてきた太陽の分身である。

このクラムボンは、釈迦の比喩でもある。釈迦は、豚肉、キノコ、毒草など諸説あるが、とにかく食中毒のために入滅する。釈迦はある意味で「殺された」のであるが、しかし釈迦が死ぬ

ことはない。比喩的にいえば何度でも生き返るのである。それは雲に隠された太陽が顔を出したり、あるいは朝日としてどんな夜も終わらせる姿を見ればわかることである。仏像には目を閉じて（半眼で）微笑を浮かべているものが多い。しばしば金色の光を放って、仏像は笑っている。まるい太陽が光りながらそんな微笑を浮かべて笑っているように見え、そのまわりで川の水が滴となって水面で跳ねたり、あるいは水音がかぶかぶと笑い声のように響いているのであろう。

「やまなし」発表の日は、寺で灌仏会が行われる日である。誕生仏と呼ばれる釈迦の仏像（寺にもよるがしばしば金色をしている）に甘茶をかける。柄杓で甘茶をかけるとき、かぶかぶと音のすることもある。甘茶をかけるのは、釈迦の誕生時、産湯として九匹の竜が天から水を注いだという伝説に基づく。まぶしい光に目が「眩む」という言葉と英語の「生まれた」（ボーン）が合成された言葉であるとも考えられるが、いずれにせよ、作中の「クラムボン」は「お釈迦様」と読み替えてよい。

すなわち、『お釈迦様はわらつてゐたよ。』『お釈迦様はかぶかぶわらつたよ。』『それならなぜお釈迦様はわらつたの。』『知らない。』という会話、あるいは『お釈迦様は死んでしまつたよ……。』『殺されたよ。』『それならなぜ殺された。』／（中略）『わからない。』という繰り返されるやりとり、釈迦の誕生と死が描かれている。その釈迦の存在を、子供たちにいつの日か認識してほしいと賢治は願っているのではないか。

子蟹たちは太陽のありがたさ、お釈迦様のありがたさを知らずに、その恩恵に浴している。永遠の命を持つお釈迦様がわざわざ入滅して見せたのは方便であり、いわば周囲への教育的なパフォーマンスである。この子蟹たちに相当するわれわれ衆生が、緊張感を失わないように配慮して下さったからである。しかしいつか我々は、自分の力でその釈迦の心に気が付かなければならない。その気づくべき智慧の源として、釈迦の言葉を記録した法華経が存在している。賢治の童話を支えているのはそういう思いであろう。賢治は、釈迦の教えが一瞬で世界中にいきわたることなど願っていない。賢治の脳裏には、日蓮の受難が一つのモデルとしてある。殺されてもまた生き返る太陽には、斬首されかけたり流刑にされても不屈の精神で法華経信仰を貫いた日蓮の姿が重なっているだろう。賢治は、作品に釈迦の教えをにじませ、あくまでもその「時」が来るのを待つつもりなのである。

例えば姉崎正治『法華経の行者日蓮』（博文館、大5・10）は毎年増刷を重ね続けて、現在も広く読まれる本である。私の蔵書は大正十三年発行で「十五版」とある（昭和五十八年に講談社学術文庫に入る）。その表紙には、雲から金色の太陽が顔をのぞかせる様式的な絵が描かれ、加えて、蓮の花と水紋も描かれる。それは日蓮を象徴する図であるが、究極的には釈迦を象徴しており、また妙法蓮華経そのものを象徴している。日蓮、すなわちお日さまと蓮花の象徴性は、こうした一般向けの

絵にも表れているように、賢治にとつては自明のことであつた。「やまなし」が描いているのは、この雲から現れる太陽と水の世界である。

「雪渡り」の前半にある「お日様がまつ白に燃えて百合の句を撒きちらし又雪をぎらぎら照らしました」という太陽の光の描写はすでに見た。太陽と百合の結びつきに関しては、先にあげた童話「四又の百合」を参考にしたい。「四又の百合」には「日がまつ白に照つて家は半分あかるく夢のやうに見えました。その家の前の栗の木の下に一人のはだしの子供がまつ白な貝細工のやうな百合の十の花のついた茎をもつてこつちを見てゐました」という表現があり、その花が作品のタイトルとなつてゐる。花はやつてくる如來に捧げられるのであるが、如來の到着は「川の向かふの青い林のこつちにかすかな黄金いろがぼつと虹のやうにのぼるのが見えました。みんなは地にひれふしました。王もまた砂にひざまづきました」と表現されている。これは「やまなし」に描かれている「にわかにはバツと明るくなり、日光の黄金は夢のやうに水の中に降つて来ました」というイメージとも相通じる。栗の木については、先に引用した詩「第四梯形」(『春と修羅』)の「一本さびしく赤く燃える栗の木から／七つ森の第四伯林青スロープは／やまなしの句の雲に起伏し／すこし日射しのくらむひまに」という一節も思い出される。賢治の地元で作られてゐるホームページ「賢治・星めぐりの街」(花巻商工会議所 賢治・星めぐりの街づくり推進協議

会)には次のような説明が記載されている。

「正偏知はあしたの朝の七時ごろヒームキャの河をおわたりになってこの町に入らっしゃるさうだ。」とヒームキャの城の人々が語り、その正偏知(悟りをひらいた方・しようへんち)を迎えるために城の王さまは百合を捧げようと大臣に用意を命じます。大臣は子どもが百合を持つてゐるのを見て、買おうとしますが、子どもは自ら正偏知に四又の百合を捧げるという話です。

ヒームキャが花巻、ヒームキャの河は北上川がモデルです。正偏知が東から来られるというのは、遠野に住んでいた旧城主南部氏の末裔である日実上人が、花巻に教えを広めたことと、ブツダがかつてインドで河を渡り、王に教えを説いたことを重ねあわせたものです。ヒームキャ城は花巻城址の位置にあるとイメージしたのでしょう。

賢治は花巻に日蓮宗の法華堂を建てるための勧進文を書いていますが、そこには日蓮在世時からの遠野南部家との深い縁や日実上人のことなども書かれており、文中に「正偏知」という言葉も出てきます。

正偏知は日実上人でもありうるが、ここはまず釈迦のことと考えるべきであろう。釈迦は太陽の分身であるから、東からくるのである。また、子供は自ら百合を捧げるという説明は間違いで、大臣がそれを受け取り、最終的に王様が正偏知に捧げるのである。寂滅の少し前に、釈迦は「自灯明・法灯明」の教え

を授け、四念処（四念住）の修行を勧めた。四念柱とは身念住、受念住、心念住、法念住の四つの修業を指すが、それが四又になつた百合の一つの解釈ともなるだろう。百合の十の花は釈迦の十の称号、如来十号のことを指している。「正偏知」は如来、明行足、仏世尊などと共に、十号の一つである。

皆が待っているところに現れる釈迦の「かすかな黄金いろがぼつと虹のやうにのぼる」という描写は、先ほど指摘したように日光の表現に呼応すると共に、やまなしの実が「天井から落ちてずうつとしづんで又上へのぼつて行きました」というとき、「キラキラツと黄金のぶちがひかりました」と表現される色彩の動きにも呼応する。太陽からの贈り物であるやまなしは、金の光を纏つて見えるのである。

『どうだ、やつぱりやまなしだよ、よく熟してゐる、いい匂ひだらう。』

『おいしさうだね、お父さん』

『待て待て、もう二日ばかり待つとね、こいつは下へ沈んで来る、それからひとりでおいしいお酒ができるから、さあ、もう帰つて寝よう、おいで』（初出形）

お父さん蟹はここで子供たちに新しいことを教えている。「待つ」という考え方がはっきりと表れているのである。実際に存在するヤマナシの実の分析を含めて、この点を次章で解明してみよう。

五

「雪渡り」では、「太右衛門さんと、清作さんがお酒をのんだうとう目がくらんで野原にあるへんでこなおまんぢゅうや、おそばを喰べようとした」失態が幻燈で映し出される。ここには明らかに飲酒を戒める教訓があるように見える。しかし、「やまなし」では「おいしいお酒ができる」まで待てと父蟹が教える。そのときを待てという言葉の背後には、いわば賢治が自分に言い聞かせていた「法華文学」の秘密が垣間見えているのだが、このシーンは、親が子供に酒の美味しさを勧めているようにさえ見える。二つの処女作における、この大きな差はどこからくるのだろうか。ここにはある意味で、賢治における文学的な成長、さらには大きな飛躍があるのではないか。それを準備したのは、トシの病臥であり、衰弱であり、またその死であつたのかもしれない。果実から酒への変容には、例えば「永訣の朝」に描かれる「ふたわんのゆき」が「天上のアイスクリーム」となるようにと折るとき、雪が甘いアイスクリームに変化をとげることへの希求が込められていたのではないだろうか。

まず実際のやまなしの実について、考えてみよう。栗原敦は「梔、棠梨。実の大きさは五〜七ミリで、甘酸っぱい。しかしズミでは、いかに沢蟹とはいえカワセミと紛うには小さすぎると思われる。ニホンナシの基本種であるヤマナシも同じバラ科の落葉高木だが、関東中部以南の山地に生え、熟すと褐色とな

る」と指摘する。¹⁰ズミ説は堀尾青史の「作品案内」(『新版・宮沢賢治童話全集』2、岩崎書店、昭53・5)から定説化したのであるが、栗原敦のいうように、やまなしの実はズミの実ではありえないであろう。また、谷川雁は次のように述べている。¹¹

北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑』(保育社)によれば、日本の山野に自生しているナシには、ミチノクナシ、ナシ(ヤマナシ)、マメナシの三種類がある。生育地は北からミチノクナシが温帯、ヤマナシが温帯・暖帯、マメナシが暖帯となっている。マメナシは岩手地方にないから**はぶくが**、本篇の『やまなし』が分類学上のヤマナシであるか、それともミチノクナシであるかについて速断することはできない。なぜならミチノクナシも現地では「やまなし」と呼ばれることがあるらしく、イワテヤマナシという別名があるからである。(中略)

「長十郎」「廿世紀」などはヤマナシの改良品種だが、ミチノクナシとヤマナシのもっとも大きな違いは、ミチノクナシが果実になっても、頂きに裂けて茶色の「がく片」を残しているのに対して、ヤマナシは実になるとき落ちてしまうことである。

この「やまなし」はカニの親子に追いかけられ、最後は「横になって木の枝にひつかかつてとま」る。がく片のあるほうがひつかかりやすいわけだし、植物図鑑も「分布ではミチノクナシは温帯に、ナシ(ヤマナシ……筆者注)は

主として暖帯に適する」と言っているから、あるいは岩手地方で「やまなし」と呼ばれるミチノクナシとしたほうがよいかもしれない。

筆者注という括弧の部分は原文のまま引用している。要するに、童話「やまなし」に描かれるやまなしの実は、素直にミチノクナシ、イワテヤマナシと考えておいてもよいことになるが、実際には何という木の実なのかははっきりと分かっていないのである。松田司郎は次のように述べている。¹²

ヤマナシは岩手県全域によく見られ、樺桜(ヤマザクラ)と同じ時期に白い清楚な花を咲かせる。花盛りの木の下に立って見上げると、白い花びら、美しい紅と黒の葯、まだしがみついている去年の黒く乾いた実、刺の多い枝と丸っこい葉が、不思議な安らぎを与えてくれる。

実は大体九月から十一月ごろにできる。

私は十一月の終わりごろに、物見山(種山ヶ原)の頂上付近で、まだ黄金いろの実をたわわにつけた木を見たことがある。あまりに可愛らしいので、実をもいで口へ入れたが、渋くてはきだした。

あとで聞いてみると、拾ってから刈った草の間に十日も寝かしておけば、渋みや酸味がぬけてうまくなるという。

ここで松田のいうヤマナシもまた、イワテヤマナシのことである。¹³しかしヤマナシはもちろん、イワテヤマナシという名称にも曖昧な側面がある。右にあげた説明では一義的に実を規

定できない。賢治自身も極めて厳密な植物的分類を考えてヤマナシという実を把握していたのではなく、経験的に山で出会ったことのある小さな梨に似た実を素直にヤマナシと呼んでいたであろう。

これまで樹木としての名前が提出されていないが、ヤマナシのイメージをもう少し詳細に検討すると、バラ科リンゴ属の落葉高木オオウラジロノキ（大裏白の木）だと考えると説明のつく部分が多い。岩手を含む本州に分布する木で、しばしばヤマナシと呼ばれているが、オオウラジロノキという名の由来は、アズキナシ属（あるいはナナカマド属）のウラジロノキ（裏白の木）に葉や実が似ており、実が大きいことからオオウラジロノキとなったという。学名は *Malus tschonoskii* である。幹は直立し高さ十〜十五メートル。花は白色、まれに淡紅色を帯びることがある。花柄とガクに綿毛がある。果実は直径二〜三センチのナシ状果である。十月頃から黄緑から淡紅色に熟す。ホームページなどで全国に渡って落果に関する情報を集めたが、結論的には、果実は冬から春にかけてずつと落下しつづける。十二月でも確実に落ちる。例えばホームページ（ブログ）の「神戸付近の野草・樹木の観察紀行」には、平成十九年十一月四日に神戸で撮影された、落下した実の写真が掲載されている。ホームページ「松江の花図鑑（島根県松江の野草樹木シダの名前が分かる植物花図鑑）」では、平成二十一年十二月六日に落ちた果実、平成二十年三月十五日に「冬芽と落ちた果実」

の写真が掲載されている。また、「認定NPO法人西中国山地自然史研究会」ホームページ掲載の実の写真は鮮やかで、大きさをのぞけば、梨の実にしか見えない。そこにはこんな記述がある。

先日、トレッキングガイドをされている方からヤマナシ（和名・オオウラジロノキ）の実をいただきました。その名のとおり大きさ以外はお店で見かけるナシによく似ていました。食べてみると少し酸味がありましたが、その中にナシの食感と甘みを感じました。

記事の更新日時は不明であるが、このホームページ（ブログ）にはまた、次のように興味深い内容が記されている。

ヤマナシの実はそのままでは食用には向きませんが、霜が降りるくらいの寒さの中に置いておくと渋みがとれ、冬におやつとして食べられていたそうです。

結実期が9月から10月頃のため、寒くなるまでは「むしろ」で包んで流水にひたしておくそうです。

オオウラジロノキの実は、十月に結実しても、すぐにすべて落ちるわけではない。着目したいのは、この、むしろに包んで流水に浸しておくとしみがつき、甘くなるのでおやつとして食べられるという部分である。寒くなると甘くなるのである。賢治の「やまなし」の父蟹が、川の流水の中にやまなしの実を放置しておけば「酒になる」というが、この表現のニュアンスには、アルコールに変わるといっても、この甘くなるという現

象があるのではないか。本来冬には冬眠しているはずの蟹の親子を、冬の夜に登場させた理由がそこに見出せる。浜みを抜くという発想は『銀河鉄道の夜』の鷺の描写に生かされる。鷺は「天の川の水あかりに、十日もつるして置かぬ、さうでなければ、砂に三四日うづめなければいけないんだ。さうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるやうになるよ」という。加えて、昔から果実酒、薬草酒の類は、お酒というよりも薬として用いられることが多く、例えばチョウセンゴミシ（五味子）は、実が酸味・苦味・甘味・辛味・塩味の五つの味がすることから五味子と名が付けられているが、五味子酒としての飲むのが普通である。咳や痰が出るのを止め、肝機能を改善し、滋養強壮剤となる。また卑近な例であるが、小学生の頃、私も何人かの級友も家で養命酒という薬草酒を薬として飲まされていた。滋養強壯の薬であり、われわれ子供にも親たちの間にも、それがお酒だという意識はなかった。「風の又三郎」で「すつばいかりんも吹きとばせ」と歌われるかりんの実は、渋いので生では食べられないが、その果実酒は甘く、喉の荒れや咳止めに効果がある。果実は酒に漬けると甘くなる。木の実が熟して落ちて、すぐに食べられず、さらにおいしくなるまで待つということ、は、人生の知恵である。寒さが実を熟成させるのである。この待つという行為、ここに賢治が童話を書くときにおける、創作態度の一つの秘密が封印されているのではないだろうか。

この創作態度の内容とも重なることであるが、おいしい「酒」

をめぐって、もう一つ考えられるのは、如実に宗教的な要素である。「御書」の中に日蓮が浄土真宗を批判した「念仏無間地獄抄」があるが、「一度飲酒食肉食五辛等念仏申サン者ハ三百万劫ガ間可墮地獄ト禁メタリ」とあり、浄土真宗の善導の行儀法則が述べられている。念仏を称える者が一度でも酒を飲み、肉を食べ、五辛等を食べると、三百万劫という長い年数の間地獄に墮ちると戒めていることを批判している。そのうえで日蓮自身が、龍ノ口法難のとき何をしたかを確認しておこう。

「御書」の中でも非常に良く知られている一節である。日蓮が処刑されようとしたとき、江ノ島の方向から月のようなまろい光が、東南から西北の方角へ動いて行った。この光のせいで月夜のごとく明るくなり、太刀取りは目がくらんで倒れ伏し、日蓮を斬首できず、兵士も怖れて逃げまどい、ある者は馬から下り、ある者は馬の上でうずくまった。夜が明けて処刑はあきらめ、一行は正午ごろに依智に着き、本間六郎左衛門邸へ入った。日蓮は酒を取り寄せて、兵士たちに飲ませた。兵士たちは頭を下げ「阿弥陀様を謗ると聞いて憎んでおりましたが、直接拝見いたしました、あなた様があまりにも尊い御様子なので、長年称えてきた念仏は捨てます」と言つて、火打ち袋から数珠を取り出して捨てたり、「もう念仏は唱えません」と誓状を差し出したという¹⁵。

日蓮は自分を処刑しようとした兵士たちに、説教をするのではなく、わざわざ酒を飲ませて苦勞をいたわった。それが信者

獲得につながった。これは法華經布教のモデルとなるはずである。酒そのものに布教的な要素はなく、日蓮は法華經の教えを

あからさまに押し付けていない。教えが滲みだすようにして、命を絶たれようとも「待つ」という態度を貫き、自然に改宗者が生まれている。一度でも酒を飲んだら地獄に落ちるといふ浄土真宗の折伏をせず、改宗に導くためなら喜んで酒を振る舞う。そして人々を無心に喜ばせる。法華經譬喻品の三車火宅の例、化城喻品の化城宝処の例を持ち出すまでもない。賢治が「やまなし」の父蟹の振る舞いに託したのは、そのような思いであろう。やまなしの実について、父蟹は、信解品の長者窮子の例のように、常に子と共にありつつ、太陽の恵みを受け取ろうとするのであろう。大正十年一月中旬に賢治が保阪嘉内に宛てた書簡(181)には、「竜ノ口御法難六百五十年の夜(旧暦)私は恐ろしさや恥づかしさに顫えながら燃える計りの悦びの息をしながら、(その夜の沈む迄座つて唱題しやうとした田圃から立って)花巻町を叫んで歩いたのです」とある。それは大正九年十月二十三日の出来事である。「その夜それから讀ふべき弦月が中天から西の黒い横雲を幾度か潜つて山脈に沈む迄それから街に鶏が鳴く迄唱題を続けました」と賢治は書く。その夜、賢治は夜明けを待ったのである。横雲をくぐる月がある。その月が沈み太陽が昇る。太陽が雲をくぐるとき、クラムボンは殺され、そしてまた笑うのである。賢治がこれほどまでに日蓮法難の日を大切にしているのならば、釈迦の誕生日はさらに

特別な思いで扱はずではないだろうか。この書簡が書かれた数日後に、賢治は無断上京するのである。

法華經は、散文部分と韻文部分という二部構成になっている。お能でいえば問狂言が散文に相当し、通俗的でわかりやすい曲の解説をする。ユーモアも交える。そしてお能の詞章が、韻文の謡と舞とお囃子によるリズムカルな表現となつて人々の心をつかむ。相乗効果を狙う二重構造になっている。ある意味で賢治も、童話を法華經の散文、詩を法華經の韻文の部分と考えて、創作していたのではないだろうか。お経の詩の部分はたいそう長いが、このモデルがあつたからこそ、自分の書く詩がどんなに長くなろうとも、賢治が気にすることはなかったのである。もちろん童話も長くなつてかまわないのである。賢治はお経のリズムで考え、歩き、サーリーブッタ(舍利弗)やアーナンダ(阿難)に話しかけるように書いたのであろう。しかし賢治は急がなかった。闇夜にたたずんでいつか必ず太陽が昇ることを信じ、それを死後に託しても待つつもりで、本当の「太陽」を作中に沈めるようにして童話を書いた¹⁶。先生である賢治が生徒たちを案内し、みんなで日の出を待ち望む「心象スケッチ外輪山」という韻文と、先生が生徒たちに話しかける形で書かれた「やまなし」という散文を、釈迦の誕生日に合わせて同時に新聞に発表しようとした意味は、そこにあるだろう。そして「やまなし」には、「酒」をめぐる、確かに熟成した思考がある。主人公である人間の兄妹を蟹の兄弟に換え、水底を舞台

にしながら、「待つ」ことと「隠す」ことを徹底して描ききつた「やまなし」の世界は、あの「雪渡り」の世界を継承すると同時に、そこから一つの跳躍をなしているといってもよいのである。

注

(1) 関登久也『賢治随聞』（角川書店、昭45・2）二五頁に、「御書」というのは日蓮上人遺文集で厚さ三寸（約九センチ）もあるのが一冊と、もう一冊は薄手のやはり御書に関する本だったのでしょう」とある。しかし「御書が二冊共」という賢治の言葉から、両方とも「御書」であったと考えられる。本論中で触れているように、賢治が持っていたもう一冊の御書が田中智學『高祖遺文録』である。國柱会に入会すれば、手元に置くのは当然である。ところで根拠は示されていないが、森山一『宮澤賢治の詩と宗教』（真世界社、昭53・6、三三頁）には「御書」というのは、田中智學編纂の『類纂高祖遺文録』であったように思われる」という指摘がある。しかし『縮刷遺文』か『高祖遺文録』かのどちらか一冊だったのではなく、棚から二冊が同時に落下したところが重要なのである。なお宗教法人「國柱会」は現在新漢字を用いている。「蓮華会」から「立正安國会」に改名され、大正三年に「國柱会」に改められたが、この名称は日蓮の三大請願の一つ「我日本の柱となる」によって田中智學が命名した。國柱会も、關德彌の名前等についても、本論考ではその都度適切と思われる表記を用いる。

(2) 高知尾智耀「宮沢賢治の想い出」（『真世界』昭34・2、3連載）。続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成』第十四卷（日本図書センター、平4・2）所収テキストを参照したが、引用は「宗教法人國柱会」ホームページの資料ページの文章に拠る。こちらのテキストには上京以前に賢治が『類纂高祖遺文録』などの拝読を怠らなかった」という具体的な証言がある。

(3) 「雪渡り」と「やまなし」は基本的に初出テキストを参考にするが、「雪渡り」は発表後の手入れ形、「やまなし」は初期形のテキストを、比較対照することがある。続橋達雄『賢治童話の展開』（大日本図書、昭62・4）七三頁は、「朝と夜の二部構成」、「言葉の響きを楽しむ幼児的なうた」、子供の成長など、両作品の構成が似ていることを指摘している。なお、「雪渡り」は妹トシの生前に発表されたが、死後発表の「やまなし」については、「子蟹たちの生理的畏怖感」、妹の死による痛切な体験を通してあらためて味識し、作者の鎮魂を祈念していると言えるかもしれない」と指摘している（続橋達雄『宮沢賢治・童話の世界』桜楓社、昭44・10、九一頁）。

(4) 「やまなし」における太陽の意味、また日蓮宗や法華經における太陽のイメージについては、日置俊次による次の論文を参照。「宮澤賢治試論——「やまなし」をめぐる」（『国語と国文学』平10・3）、「宮澤賢治」「やまなし」再論（『青山語文』平25・3）、「宮澤賢治論——『法華經』受容における「太陽」のイメージ——」（『青山語文』平26・3）。例えば「そのとき霧の向ふから、大きな

赤い日がのぼり、羊歯もすぎごけもにはかばつと青くなり、蟻の歩哨は、また厳めしくスナイドル式銃剣を南の方へ構へました」「朝に就ての童話的構図」、「太陽はいつか又雲の間にはひり太い白い光の棒の幾条を山と野原とに落します」「チュウリップの幻術」、「そして林は度十の居た時の通り雨が降ってはすき徹る冷たい雫をみじかい草にボタリボタリと落しお日さまが輝いては新しい奇麗な空気をさはやかにほき出すのでした」(「度十公園林」)という、様々な童話の最終行に現れる太陽は、当たり前のようにそこに居ながら「本当のさいはひが何だかを教へる」(「度十公園林」)存在なのである。

なお、秋枝美保『宮沢賢治の文学と思想 透明な幽霊の複合体——開かれた自己——「孤立系」からの解放——』(朝文社、平16・9)三三八頁に、大正十一年十一月の「天業民報」で「相対性理論」の本格的な紹介がなされたことが、次のように指摘されている。

アインシュタインの相対性理論については、「相対性理論の基礎概念」と題して、十一月十六日から三十日まで計十二回にわたって連載されており、かなり詳細な解説をしている。その第一回に「アインシュタインの相対性理論の基礎概念を一般的に分り易くする為に解説映画が独逸に於て作られたものを東京朝日社で見た」とあり、その映画の出来に「驚かぬものはなかつた」という。それで「その通俗化された映画の説明にならつて」解説するとしており、映画で行われた実験の様子を、その映像の説明を通して行うという具体的なものである。

相対性理論はいわば光の理論であるが、映画とはまさに光の作用によって、当時の科学技術と芸術的表現とが合体したものである。そして、映画のミニチュア版が幻燈であるといつてよい。したがって幻燈を扱う「やまなし」において、相対性理論が意識されていた可能性は高い。「やまなし」に太陽への強い思いが隠されていることは明らかであるが、賢治における光の根源としての太陽への讃仰には、早い段階から、光の絶対性を核とする相対性理論も組み込まれていったと考えられる。

(5) 宮澤清六「兄のトランク」(筑摩書房、昭62・9)六七頁。

(6) 鈴木東民「筆耕の頃の賢治」(「宮澤賢治全集」第十一巻月報、昭57・2、草野心平編『宮澤賢治研究』筑摩書房、昭和58・8所収)

(7) 佐藤泰平「宮沢賢治の詩・童話と音楽——童話「雪渡り」を中心に——」(「駒澤短大國文」平12・3)、恩田逸夫「宮沢賢治における大正十年の出郷と帰宅——イーハトヴ童話成立に関する通説への検討を中心に」(「明治薬科大学研究紀要」昭51・9)、中地文「宮澤賢治「雪渡り」考——法華文学としての童話の試み」(ブラット・アブラハム・ジョージ・小松和彦編『宮澤賢治の深層 宗教からの照射』法藏館、平24・3)を参照した。

(8) 山川智應「日蓮上人傳十講」(新潮社、大10・7)一四〇頁。

(9) 田中智學「日蓮聖人略伝」(師子王文庫、大正2・5)一二—一三頁。田中智學『本化大教の信』(出版年等不記載)にもほぼ同一の文章が載り、國柱会の定番の文章といつてよい。智學の『大國聖日蓮上人』(春秋者、昭4・3)は、「世界を照らす太陽の直

射圏で、「太陽の児」は生まれた」（八二頁）、「日蓮上人と太陽との宇宙に鳴り渡る二重奏は、既に早く母胎の中から響いてゐる」（八七頁）というように、太陽と日蓮をドラマティックに重ねて描いている。

- (10) 栗原敦「テキスト評釈「やまなし」」（『国文学』昭57・2）。続橋達雄「賢治童話の展開」（大日本図書、昭62・4）七二頁も、「やまなしはズミ（桝・棠梨）のことといわれ、その果実は五〜七ミリの小球形で赤または黄色、熟すと甘酸っぱい」と指摘している。
- (11) 谷川雁「賢治初期童話考」（昭60・9）一七九頁。

- (12) 松田司郎「宮澤賢治 花の図誌」（平凡社、平3・5）一三六頁。
- (13) 神戸大学大学院農学研究科附属食資源センター所属の片山研究室のホームページには、岩手県を中心とした東北地方におけるイワテヤマナシの研究の状況が記されている。この説明で多くの在来種があることが分かる。以下に解説を引用する。

日本には野生のナシ（梨）があることを存じでしょうか？ 大正、昭和初期に行われた国内の梨の探索ではニホンヤマナシ、イワテヤマナシ（ニミチノクナシ）、アオナシ、マメナシの存在が確認されています。現在の栽培ナシは大陸から渡来したとする説と日本固有であるとする説がありますが、いまだ明らかになっていません。東北地方を中心に分布する宮沢賢治の『やまなし』でも有名なイワテヤマナシは芳香性の果実を持ち、イワテヤマナシ由来の在来種（衣通姫、金光寺、岩手無核など）が存在していたことが知られています。アオナシは富士山麓を中

心に長野県や山梨県に分布し、果実が熟しても黄緑色で、過去に栽培の歴史もあったようです。マメナシは果実が1センチメートル程で小さく食べられませんが、現在は栽培ナシの台木として利用されています。マメナシは愛知県、三重県に群落が見つかっており、国の天然記念物に指定されています。近年、これらの野生、半野生状態のナシ属植物はほとんど利用されなくなり、また開発により急速に個体数が減少しています。私たちはこれらのナシは日本のみならず人類にとつて貴重な財産（遺伝資源）だと考えており、当センターでの維持、保存事業をはじめとしています。

これまでにイワテヤマナシの生息域である東北地方でのナシ属植物の分布調査を岩手県、秋田県、青森県の全市町村でこない1500本を超える本を確認しました。特に北上山系の早池峰山以北に分布していました。聞き取り調査から30種類を超える地方名、在来種があることが分かりました。

このように、三十種類を超える地方名や在来種があるということなので、混乱が生じてくるのも無理はない。要するに民間では、山で見かける梨に似た実がヤマナシと呼ばれているわけで、作品中の実が厳密にイワテヤマナシでなければならない必然性は存在しない。

- (14) インターネットのブログなどで報告されている例では、オオウラジロノキの実の画像にも差があり、植物学的正確さが保証されていない例もあるが、その土地でオオウラジロノキと呼ばれてい

るものに、梨に酷似した似た実が見られ、自然にヤマナシとも呼ばれている点が重要であろう。この木は本州全体に分布する。また作品の舞台には、岩手県と限定しなければならない要因は存在しない。独立法人農業生物資源研究所（生物研）の平成十七年度「植物遺伝資源探索導入調査報告書」掲載の池谷祐幸・間瀬誠子・佐藤義彦「北東北地方におけるナシ属・リンゴ属の探索・収集」（『植探報』通巻第22巻、平18）によると、現在の「北東北地方には、リンゴ属のオオウラジロノキ（*M. tschonoskii* C. K. Schneider）も分布するが、本種は極めて希な植物で分布情報も乏しいため、今回の探索対象からは除外した」としている。しかし樹が存在していることは、この記述でも明らかである。「タネリはたしかにいちにち囁んでゐたやうだった」には、「山梨のやうな赤い眼」という表現が現れて赤い色が強調されるが、オオウラジロノキの実は林檎のように赤くなる場合がある。

(15) 「念仏無間地獄抄」（田中智學編『類纂高祖遺文録』國柱産業書籍部、大4・10、一四二頁）。龍ノ口法難の時の酒振舞いについては、以下に原文を引用する（『種種御振舞御書』前掲書三九七頁）。

酒取ヨセテモノ、フ共ニノマセテ有リシカバ、各カヘルトテ、頭ヲウナダレ手ヲアザヘテ申様。此程ハ何ナル人ニテ御坐スラン、我等ガ憑テ候阿弥陀仏ヲ謗ジ給候ト承ハリ惡ミ進テ候ヒツルニ、親リ拝ミ進セヌル事共ヲ見進テ候ヘバ貴サニ年来申ツル念仏ヲ捨候トテ、火打袋ヨリ念珠ヲ取出シテ捨ル

者モアリ、今ハ念仏申サジト誓状ヲ立ル者モアリ。

(16) 釈迦は常に教えの中心から自分を隠すことに腐心している。「南無阿弥陀仏」は釈迦の教えであり、阿弥陀称賛である。しかし「南無妙法蓮華経」からは釈迦の姿が消えている。例えば釈迦の入滅も、教育的配慮から仮に姿を隠して見せたのである。自身を表層から深く沈めて解説を待つこと、それが釈迦の方法であり、その方法論が法華経となっている。それは深層を探れという釈迦の導きである。賢治はそうした方法に習おうとしたのではないか。賢治は韻文と散文を別の次元のもののように考えていなかった。彼の作品はすべて地続きのものであり、その核には法華経の教えがあった。その教えの根幹には「太陽」のイメージがあった。賢治の作品や言葉の中には、「隠れていた太陽が現れる」あるいは「光が現れる」というイメージが溢れている。「やまなし」と「心象スケッチ外輪山」は一体である。國柱会で結局一度も智學に会うことのできななかつた賢治には、それもまた崇拜する太陽が隠された状態として、宗教的な解釈をしたのではなかつたのだろうか。隠された光は、しかし、必ずいつか現れるのである。見田宗介『宮沢賢治』（岩波書店、昭59・2）は、賢治におけるアインシュタインの影響を指摘しているが、ミンコフスキー空間では時間も空間の一つの次元であるため、過去も未来もこの四次元世界の内部に存在していることになる点をあげて、仏教哲学の「三世実有」の説と呼応すると指摘している（二五頁）。同様に、賢治にとって、韻文も散文も同一空間にあつて同じ太陽の周囲をめぐるっており、

そこには「待つ」という発想が組み込まれていたのである。相対性理論の根幹には光の絶対性があり、光の前では、空間も時間も含めてすべてが相対性にさらされる。この光を信じることが「待つ」ことなのである。

(ひおき・しゅんじ／本学教授)